

一八八三年六月二十五日(月)

バララーム邸の礼拝室において——聖ラーマクリシュナ、ラカール、校長たちと共に

タクール、聖ラーマクリシュナは今日、カルカッタのバララーム邸に来ておられる。傍にラカールと校長が坐っている。タクールは霊的な恍惚状態でいらつしやる。今日はジョイスト黒分五日目、月曜日。アシャル月十二日。キリスト暦一八八三年六月二十五日。時間は午後五時ころ。

「聖ラーマクリシュナは前三昧状態で話しておられる。

「一生懸命に呼び求めさえすれば、必ず自分の本性が見えてくるよ。だが、世俗の楽しみに気持ちが向いている限り、神の叡智で満たされることはない」

校長「はあ。あなた様の仰せの通り、(神の方向へ)ジャンプすることですぞいす」

聖ラーマクリシュナ、我が意を得たり、という表情で——

「そうだともし」

皆が黙りこくっているのです、タクールは再びお話になる。

校長に向かつて——

「ね、誰でもみんな、アイトマ・ケルセン真我と対面することができるとだよ」

校長「はあ、しかし、神が行動者^{カルクター}でございますから、あの御方がかくの如くさせておられるので——つまり、或る人には高い靈性を与え、ある人は無智のまま放っておかれ——」

〔自性を見ること——見神あるいは見自性の方法——真剣に祈ること——永遠絶対と活動の融合〕

聖ラーマクリシュナ「ちがうよ。あの御方に一生懸命祈らなけりゃいけない。心の底から真剣になれば、あの御方は絶対に祈りを聞いて下さるんだよ」

一人の信者「はい、おっしゃる通りだと思います。私^クの意識があるのですから、祈らなければならぬのだと思います」

聖ラーマクリシュナ、また、校長に向かって——

「玩具^{リイグ}をつかみ、つかみ、本物のところへ行くんだ。ハシゴ段をつかみ、つかみ、屋根にのぼるようなものさ。永遠絶対^{ニテイヤ}に対面した後は、屋根から下りてきて活動^{リア}の世界に住む。信仰を持ち、信仰者といっしょに——。これがいちばん成熟した考え方だよ。

あの御方はいろいろな相^{すがた}でさまざまな遊戯^{リイグ}をなさる。宇宙唯一神としての活動、天神地祇^{てんじんちぎ}としての活動、人間としての活動、諸々の世界としての活動。あの御方は人間の姿をとって——化身として、いつの時代にもこの世においでになる。ほんとの愛と信仰を教えるためにね。

チャイタニヤ様^{デーヴァ}をごらん、神の化身を通じてだけ神への愛と信仰が味わえるんだよ。あの御方の無限の遊び——。だが、わたしに必要なのは愛と信仰だ。わたしは濃いミルクがほしいんだよ。牝牛^{めうし}の

1883年6月25日(月)

乳房を押えるとミルクが出てくる。神の化身は牝牛めうしの乳房だ」

タクールは、わたしは化身だから、わたしに会えば神に会うことになる、ということをおっしゃったのだろうか？ チャイタニヤチャイタニヤ様のことを言われて、ご自分のことを暗示されたのだろうか？